

平成 26 年度 廃棄物資源循環学会九州支部総会・講演会開催報告

○日時：平成 26 年 5 月 17 日（土）

総 会：13：00～13：45

講演会：14：15～15：15

○会場：福岡大学七隈キャンパス文系センター4 階

<総会>

まず、事務局より総会の定足数 58 名に対し、正会員 140 名（出席者：43 名、委任状：97 名）の出席があり、総会が成立していることが報告された。次いで議事に先立ち、島岡副支部長が議長に選任され、議事録署名人として議長の他に染谷副幹事長、及び徳永監事が指名された。

議事に入り、1 号議案「平成 25 年度事業報告」、2 号議案「平成 25 年度収支決算」について、事務局及び担当幹事から報告があり、続いて 2 号議案の「監査報告」が、奥田監事からなされた。質疑応答ののち、拍手による全会一致で承認された。次に 3 号議案「平成 26 年度事業計画（案）」、4 号議案「平成 26 年度収支予算（案）」について事務局及び担当幹事から提案がなされ、質疑応答ののち、拍手による全会一致で承認された。最後に 5 号議案「平成 26～27 年度理事・監事（案）」について事務局からの提案が承認された。



<講演会>

- ・講師：清野 聡子 准教授（九州大学大学院工学研究院）
- ・演題：漂流・漂着ゴミ問題と海洋の生物多様性保全 一足元から地球まで
- ・講演内容

講演の中で、我々の住んでいる九州の近海である東シナ海や福岡の海、玄海灘も漂流・漂着ゴミによる汚染の影響を受けているとの報告があった。長崎県対馬や五島では、人が行けない断崖絶壁の崖下に大きいものでは俵ほどの発泡スチロールや薬品が入っていたタンク、小さなものではペットボトルなどの漂流・漂着ゴミが堆積し手を付けられない状態にある。その上に植生が繁茂して固定化したり、堆積厚が 2～3m に達する箇所もある。このような問題は、ここに限ったわけではなく、他の小さな沿岸市町村でも同様であり、高齢化が進む離島や人口減が激しい地域では特に深刻な問題である。また、漂流・漂着ゴミが放置されているのが九州では長崎県が海流や季節風の関係で特に多く、国定公園、国立公園内の海岸もほぼこの状態である。



東シナ海では、外国船による洋上投棄や排出国不明のオイルボールが増加し、油まみれの鳥が対馬や福岡の海で見られることもある。九州西部の海域は、栄養豊富でクロマグロやスルメイカの産

卵地であるが、近年、汚染されてきており、稚魚の育つ環境が悪化してきている。このままでは、北上するはずのマグロが育たず、北日本の漁業の衰退が懸念される。そこで長崎県壱岐の漁業者は、マグロなどの回遊魚を守るために北海道の人々との交流を始めている。また、研究者も対馬暖流流域ネットワークの形成を目指している。

一方、北半球の太平洋には日本、アラスカ沖、カリフォルニア沿岸、ハワイ沖、ミクロネシアと流れる循環流があり、アジアで発生したゴミは循環して太平洋を漂流する。太平洋ゴミベルトは有名な話である。今までの洋上ゴミは、漂着した所が責任を持って処分していたが、今後は、国際的な問題となり発生国の負担になる可能性もある。この流れを示したのは、日本の震災ゴミの漂流である。多くの震災ゴミがアメリカ、カナダに漂着したため、日本政府はアメリカ、カナダにお見舞金を送金し、発生原因の国が処理費を負担することを示す形となった。

最後にもう一点、地震によって発生する震災ゴミで注意をしておかなければならないのは、停電により冷凍・冷蔵庫の中身が腐敗し手を付けられなくなることから、早急に対応する必要があるとのアドバイスを受け、講演は終了した。